

## 「自覚」と「不快」

### ― 埴谷雄高の創作における西田幾多郎の影響 ―

今泉 早織

#### 序

埴谷雄高は日本の戦後すぐに活躍したいわゆる「第一次戦後派」の作家である。その代表作である長編小説『死霊』によって知られる。『死霊』は一九四六年に発行された雑誌『近代文学』の創刊号から一九四九年一月の三七号までに一章から四章までが連載され、その後断絶を経て、一九七五年の『群像』から連載を再開している。

この『死霊』という長編小説は西洋思想からの影響や共産党経験など複雑な要素を合わせ持ったテキストであり、先行研究ではカントやドストエフスキー、シュテイルナーなどの西洋の思想家、他の同時代の戦後派作家との比較や影響関係についての研究が主にこなわれている。このように西洋からの影響が色濃いこと、作家であることから、埴谷は日本の思想史の文脈からはやや切り離されている印象を受ける。しかし、本稿では埴谷を日本思想史の中に位置

づけることができるのではないかとという観点から、『死霊』を中心とした埴谷雄高の思想と西田幾多郎の哲学との関連について追っていくこととした。

西田幾多郎と埴谷雄高という組み合わせは決して突飛なものではない。たとえば、埴谷雄高全集の年譜で、白川正芳は「西田哲学がヒントになった」と西田の思想が埴谷の「不可能性の文学」を指す根拠となったことを指摘している<sup>1)</sup>。また、ごく短い言及ではあるが、鶴見俊輔は埴谷の思想について、「多くの所で、西田幾多郎の思想に似ている」とし、双方とも「思想以前」の部分へ踏み込んでいった思想家として捉えている。鶴見は、埴谷は自身が手にした「思想以前の場所」を何が起こしても決して手放すことがなかったとして以下のように述べている。

埴谷のとらえたものは、西田幾多郎のとらえた絶対無にちかひものだったのかもしれない。私には埴谷雄高は西田幾多

郎と双生児のように見える。<sup>②</sup>

埴谷が西田幾多郎の著作を読んでいたことは既に明らかである。大岡昇平との対談では『善の研究』よりも先に『自覚における直観と反省』を読んだと述べており<sup>③</sup>、立花隆との対談では西田の「絶対矛盾的自己同一」を日本人の思想であるとし、日本人には西田をすぐ理解することができると語っている<sup>④</sup>。しかしこうした埴谷による西田への言及は、他の西洋の思想家への言及に比べれば決して多くはない。その数少ない言及の中でもとりわけ注目に値するほど多くを述べているのは、一九四八年三月の『綜合文化』に載せた「即席演説」においてである。ここで埴谷は西田の『自覚における直観と反省』に直接言及している。『綜合文化』は一九四五年から四八年にかけて発行された機関誌であり、「即席演説」は、当時岡本太郎と花田清輝がつくった「夜の会」の会員として認められるための演説という体裁をとった文章である。

その中には埴谷雄高らしき「わたくし」とくねくね入道のボーイグが登場する。ボーイグは「わたくし」が若い頃に見たイブセンの「ペエル・ギュント」の舞台上で登場し、「おれはおれだ……」とつぶやきつづける影も形もない存在である。そのボーイグに「わたくし」が惚れ込んで以来、ボーイグは「わたくし」の胸の中の舞台上にやってきて

いる。

「わたくし」は灰色の壁に備え付けてあった官本の中に西田幾多郎の『自覚における直観と反省』を見つけ、読んだというが、このことは埴谷が刑務所で西田の同著を読んだという事実そのまま即している。そして、その読書に際して「わたくし」とボーイグは怪しい気持ちになったというのである。ボーイグは「わたくし」に「どうしてこんな義経の八艘飛びをやらなければならないの？」と問いかける。「わたくし」はがっちりした観念がないこの国では、切れっぱしの観念から観念へ飛んでみるだけでもかなりのエネルギーを要すること、ボーイグが「おれはおれだ」と胸を張って言い切れないのはこの国にがっちりとした観念がないからであることを述べる。「わたくし」によれば、西田は「哀れな精神力をはりつめて、一生、ハツタリをつづけた犠牲者」なのである。

ボーイグ——そして、このひとは、意識せざる、善良なハツタリなのですね。

わたくし——そう、真面目だ。

ボーイグ——どうも淋し過ぎるなあ。

わたくし——そう、淋し過ぎる。

ボーイグ——ええい、どうです？ここでひとつ、意識せる、非

善良なハッターをこのわたし達がおつばじめてみたら、どうでしょう？<sup>55</sup>

ここでボイグと「わたくし」の会話を通して、埴谷は意図的に「ハッター」をはじめたことを告白するのである。「ハッター」とは、相手を脅かすために実際よりも物事を大げさに言うことである。ここではこの「ハッター」という語は、言語の問題と関係があることが示唆されている。ボイグの信念とは「言語表現は、宇宙出現人類発生以来はじめて嘘八百を可能ならしめた表現形式」であるからだ。つまり、言語表現は「何でも言えてしまふ」ものとしてとらえられ、ボイグの自由の問題とつらなっているのである。

この「ハッター」、すなわち言語表現の問題と、西田と埴谷の双方が問題とした自同律については本稿では主に取り扱っていく。

## 一、「自覚」と「不快」の動性

冒頭にも述べた「即席演説」において問題にされていたのは西田の『自覚における直観と反省』という著作である。ここで少しその内容について確認しておきたい。

まず西田は序に自覚的体系の形式によってすべての実在を考え

るという方法によって価値と存在、意味と事実の結合を説明しようとした、と述べている。西田はこの著作の中で主観と客観は相対的な区別にすぎないとし、私の認識から独立した存在を否定しようとするのである。

題にある「自覚」と「直観」と「反省」については、序論の冒頭にて説明がなされる。西田は「直観」を「主客未分の不断進行の意識」とし、「反省」を「この進行の外に立つて遡ってこれを見た意識」と定義している。そのうえで「どうしても直観の現実を離れることのできない我々がいかにして反省が可能か」「反省は直観にいかんにか結合せられるか」「反省は直観に対していかなる意味を持つているか」といったいくつかの問題提起をおこなうのである。そして、西田自身は直観と反省の関係を明らかにするものは我々の自覚であると思う、と続ける。西田は自覚について以下のように述べている。

自覚に於ては、自己が自己の作用を対象として、之を反省すると共に、かく反省するといふことが直に自己発展の作用である、かくして無限に進むのである。反省といふことは、自覚の意識に於ては、外より加へられた偶然の出来事ではなく、実に意識其者の必然的性質であるのである。<sup>56</sup>

西田がいう「自覚」は「自己の中に自己を写すこと」であり、それは即ち「自己を知ること」であるといえよう。西田の「自覚」という言葉を考えるうえで、その「自覚」が運動的性質を持つており、無限に自己発展するものであるということに注意したい。

自覚といふのは、普通に考へられて居るように後の意識が前の意識を其儘に写すといふことではない、意識内容の内面的発展をいふのである。反省が直に発展の過程となり、知ることが直に事実となるのが自覚である。<sup>5)</sup>

先に述べた反省という語があるが、反省は、意識がそれ自身に還りゆく運動であると西田はいう。また、ある意識内容を同一と考えることは、意識がそれ自身の中に還り行くことだとも述べている。たとえば「甲が甲である」というときは我々が「甲」を反省するといふだけでなく、甲そのものから見たとき、「甲」という意識が己自身の中に還ることなのだといふ。それは言い換えれば、「一層深き実在たる統一的「甲」が己自身を顕現することである。即ち「統一的「甲」を実現することであるのだ。この場合の「我」の働きは、より大きな統一の働きを意味する。反省はより大きな統一の直

観、大なる生命の発展を意味するものである。

西田によれば意識にとつては「知る」ということが即ち存在であり、「働く」ということが事実である。つまり、「我が我を知る」ということは「我がある」ということであり、「我がある」ということは「我が我を知る」ということになる。「我が我を知る」ということは「我が我を維持する」ということで、「我が存在する」とこととなる。西田は「我が我を知らざる我は我といふことができない<sup>6)</sup>」<sup>7)</sup>と云い、「知る」「存在する」「維持する」ということを発展的な統一としてとらえるのである。

ここまでは、西田の「自覚」が動的かつ発展的性質を持つものである、「自己を知る」働きであると同時に「自己を維持する」働き、即ち「ある」ということであることを確認した。

西田のいうこの「自覚」と、埴谷の独自の用語である「自同律の不快」との類似性を指摘する先行研究がある。山田稔は、西田のいう「自覚」と埴谷のいう「自同律」について、不断の自己差異化と発展の運動という点においてきわめて類似したものではないかと指摘する。そこで、次に、埴谷における独自の用語、「自同律の不快」について確認していきたい。

「自同律」とは「同一律」のことであり、「自覚における直観と反省」の中でもキーワードとなっている。「同一律」は「AはAで

ある」とあらわされる基本論理であり、西田はこの論理を判断作用の根底となる一種の論理的當為を言い表したものと考えている。一方、埴谷は特に「私は私である」ことにまつわる「不快」のことを「自同律の不快」と呼んでいる。この語は『死霊』の中でも重要な役割を担っており、冒頭で引用した「即席演説」の中でも言及されている。

「自同律の不快」は『死霊』の作中でもさまざまに描写されているが、第二章で「一種論理的な感覚<sup>⑨</sup>」と言いあらわされていることは示唆深い。主人公である三輪与志は、「俺は俺だ」と言い切ることができない。言い切つてしまいたいのだが、あえてそれを言い切れることは「名状しがたい不快」を彼にもたらずのである。また、この「不快」は主辞と賓辞のあいだに跨ぎ越すことができないほどの深淵として広がっている、というようにも描写される。

「自同律の不快」はそもそも埴谷が少年時代から持ち合わせていた感覚であり、その論理的な意味の付与も後からなされたものにならざるを得ないため、様々に解釈が可能なのである。「論理的な感覚」としての「自同律の不快」を考える場合は、カントの「超越論的弁証論」の部分と関連させて語られることが多い。ここでは埴谷がカントから受けた影響や詳細な議論には立ち入らないが、簡単に述べてしまうと、「思惟する私」と「存在する私」の乖離が克服されてい

ない問題として埴谷に提出されてくることとなる。

この三輪与志と同じ「不快」によって言葉を失ってしまったのが「即席演説」におけるくねくね入道ボイグである。「わたくし」と一体化したのちのボイグは、当初の舞台で吠いていたように「おれはおれた……」と叫びたいのであるが、「異常論理病」によってそれを叫びあげることができない。「異常論理病」とは、「断定と同一瞬間に、その断定とまつた同一の力強さと妥当性をもつて反対意見がおこるといふ奇病」である。これを「自同律の不快」と絡めれば、「俺は」と述べた際、「俺だ」に対立するあらゆる賓辞があらわれて「俺だ」と叫ぶことができなくなってしまうということになる。このことは埴谷がひとつの観念を思いつくと、すぐに反対の観念が思いつくために「二律背反居士」と呼ばれたという事実と関連している。果たして、「俺は」という「俺」と、「俺だ」という「俺」を繋げることがこの「異常論理病」においては苦痛であるということになる。ここでいわれる「異常論理病」については三節で取り扱うこととする。

しかし一方で、「自同律の不快」は充たされざる自己を無限に発展させてゆくエネルギーとしても描写されている。「自同律の不快」のこの発展性こそが西田の「自覚」の構造と類似したものである。山田が指摘するところである。次節では「自覚」の構造と、自らを發

展させてゆくものとしての「自同律の不快」を比較していく。

## 二、「同一性」と「差異性」

「こ」までで、西田の「自覚」と埴谷の「自同律の不快」が双方ともに発展する動性を持ったものであることを確認した。西田の「自覚」の動きは簡単にいえば反省の働きにより、反省するものが反省されるものの中に還りゆき、更に発展的な自らとなることであった。「こ」でいう自覚は「知る」ということと「ある」ということ、「維持する」ということがすべて相即しあう事態であるという。

さて、一方の「自同律の不快」がすべてのものの発展の動機として描かれていることについては既に触れた。『死霊』の中では、当初気配とされていたものは事物が「自らが自らである」ことの「不快」に耐えかねて発するものであるとされた。三輪与志には、意識ある自らだけでなく、事物すべてがその「不快」によって自らを揺すっているように思われるのである。さらに、五章では存在の秘密を語る夢魔が「自同律の不快」を、「万象をその万象自体たらしめずひたすら前へ前へと異なつた変容へ向つてつき動かすその自らに内在する満たされぬ力」「あらゆる事物の変化の原動力」と形容する<sup>(40)</sup>。すると、「自同律の不快」が、その動性においては「自覚」

と同様でありながらも、夢魔の示すとおりひたすら事物の変化の前へと進めさせる力であるならば、「自覚」のように自らに戻つてくる再帰性を持たないということになるのではないだろうか。

西田の「自覚」の再帰性について、もう少し見てみよう。先にも少し触れたが、『自覚における直観と反省』の中では、西田は「自同律」について「論理的当為」を含んでいるとした。すなわち、「甲が甲である」というとき、それは「甲が甲であると考えなければならぬ」と捉えられるのである。西田は「甲」が「甲」を知るのでなく「その根柢たる当為を意識する<sup>(41)</sup>」のであるという。つまり、「甲は甲であると考えなければならぬ」という当為の意識によって甲は甲を意識し、その意識の働きによって自らを定立していくこととなる。

西田は自らが自らの同一を知ること、すなわち自覚が「我の本質」であり、「我は我を反省することによって発展する<sup>(42)</sup>」のだという。ただし、こうした「自覚」が起こって「我」の発展がある背景には、「我」と「我ならざるもの」を包括する統一がある。

例へば、論理的意識の発展について考へて見ると、「甲」の「自己同一」といふことは一方から見れば「甲は甲である」といふことである。「甲は甲である」といふことは「甲」を「非甲」

から区別することであつて、その裏面には「非甲」を「甲」から区別する働きを含んで居る、即ち「非甲」の指定とみることも出来る、斯く見るといふことはこの二者の根柢に更に統一的同一者があつて、この二者はその分化と見做すことができるといふことを意味して居る、而して斯く分化発展するのは外からその力を得来るのではない、同一者が自己の中に自己を写すのである。<sup>13)</sup>

西田はここで「甲」「非甲」の双方を包んだある同一のものから、当為の意識によつて「甲」が分化してくと考へるのである。そのため、「甲」を反省するとき、意識はより深い「統一的甲」を直観することとなる。そのため、「自ら」へ戻るといふ「再帰性」は、ある意味では主語の「甲」と全く同一ということとは少し異なつてゐるように思われる。この反省の運動について、同一性と差異性の双方を含んでゐるとして石神豊は「甲は」の「甲」を「甲1」、「甲である」の「甲」を「甲2」としたうえで以下のように述べてゐる。

ここで、「甲1」と「甲2」がまったく同じものだとすると反省自体が成り立たない。なぜなら「反省の運動は、「甲1」と「甲2」が異なることによつて初めて成立するのであり、兩

者がまったく同一であるならば反省は起らないのである。しかし「甲1」と「甲2」がまったく異なるとしても反省は成立しない。なぜなら反省とは、自己への反省であり、他者への反省ではないからである。自己ということでは同一でなければならぬ。このように同一性と差異性が一つになつてゐるのが反省（の運動）である。<sup>14)</sup>

このように自らから発して自らに帰りつつも自らではない発展となるありかたを山田は「自同律の不快」と重ねて指摘してゐるのである。<sup>15)</sup>『死霊』の中では、「不快」は三輪と志を支える原理でありつづけ、彼は以下のように考へる。

《他の領域に於ける原理が何であれ、自身を自身と云い切つてしまいたい思惟に関する限り、この原理に誤りはない。おお、私は私である、という表白は、如何に怖ろしく忌まわしい不快を支えられてゐることだろう！この私と私の間に開いた深淵は、如何に目眩むような深さと拡がりを持つてゐることだろう！その裂目を跨ぎ、跳躍する力は、宇宙を動かす槓杆を手取るほどの力を要するのだ。》<sup>16)</sup>

『死霊』のこの部分は、「即席演説」で、ボイグとわたくしが切れっぱしの観念から観念へと飛んでみせるだけでも力が要る、と話していたことを思い出させる。その後、三輪与志は、その「私」と「私」とのあいだに足をかけ、引き裂かれてしまった事物の悲痛な呻きを聞く。そして、その「不快」こそが、「宇宙を動かす最も単純な秘密な力」であると感ずる。その夜が三輪与志にとつて「不可能なもの」へ向かつて一步を踏み出す夜となつたのだが、庭を眺め下ろしている与志は「無限の寂寥感」を覚えるのである。そしてそれは「果てもない、侘しい、引き込まれるような感覚」であり、「無限の遁走」にのみ彼の自由があるかのような「寂しさ」であるという。この「寂寥感」は西田の『自覚における直観と反省』を読んだボイグと「わたくし」が感じた「侘しさ」や、「淋しすぎる」といった感想と重なってくるのではないだろうか。船から船へと飛び移り、ついにはどこかへいってしまつたという義経の伝説をあらわす「義経の八艘飛び」という単語も、西田が全力を尽くして無理に「私」と「私である」を繋ごうとしたことを示唆するかのよう思われる。

「不快」によつてすべてのものが呻きあげる泣き声について、第四章で、三輪与志は泣いている恒星の話を見木恒子にする。数億光年先にあるその恒星は自らの唯一の起動力である不快を味わいつ

くすべく、泣いている自らの中に止まっているという。「それは、何時、泣きやむのでしょうか」と見木恒子に尋ねられた三輪与志は「自身でなくなつたふうになれば、と答えるのである。」「不快」は「不快」によつて自己を自己から逸脱させつつも、未だに自己の中にとどまり続けるといふ矛盾的性格を持っている。

また、『死霊』では「無限の拡大感覚」と「無限の縮小感覚」が同一になつている描写がある。「われ」が解体され、「われならざるわれ」へと移行しつつも「われ」であり、果てを指してゆく無限の運動は西田のいう「反省」の動きと同様、「われ」の根底へと還る動きと似ていると言ひ得るのではないか。

このような無限の拡大感覚は、或いは逆にこんなふうにもいえた。それは、彼自身の無限の縮小感覚なのであつた。囁きと忍び笑いとさわめきに取りかこまれて、涯もなくつらなつた白けた道を進んでゆく彼は、一つの巨大な、その底部も見透かしたい漏斗のなかへ降りてゆくような気がした。それは見渡す限り遙かな、しかも、次第にその口径を狭めてゆく透明な円錐に違いなかつた。其処へ入つて行くと、次々に眼を見開く物体の凝視に射すくめられて、彼自身が無限の縮小過程を辿るよう思われた。彼とともに移動する彼自身の



圏を次第に狭めながら、行きつく果ては、針の先で突いたような漏斗の先端、眼にもとまらぬような一点なのであった。(18)

このように埴谷にとって主体の「われ」が消えてゆくということ  
は螺旋状に落ち込みながら「無限に小さくなる」というかたちであ  
らわされるのである。この場面が西田哲学を意識したものであるこ  
とは、後年の対談で埴谷が「主客未分」という言葉を用いて「針の  
ような細い鋭い自己」と「もの」の気配について述べていることか  
ら読み取れる。

一見して矛盾した言説のように聞こえるが、そのように無限に小  
さくなって、もはや「われ」とはいえない「われ」となったとき、  
枠をこえてもの同士は「気配」によって交感を行うことができ、  
と埴谷はいう<sup>(19)</sup>。埴谷のいう「気配」は「主辞」「賓辞」にまだ至  
らない、「自己以前の世界」「主客未分」の状態において自発してく  
るものであり、「存在」の「不快」を訴える言葉である。

埴谷はそのことを踏まえた上で、自らの創作方法は「写実的では  
ない」という。写実的には書けず、物事をそれそのものでありたく  
ないものとして受け取って書くというのである。つまり埴谷は「自  
同律の不快」を内在させる存在として事物を描いていることになる。

### 三、「言葉」以前への回帰と「難解さ」

ここまでは、西田の「自覚」と埴谷の「不快」には「自らを出発  
して自らに還る」運動性および発展性がある点、「同一性」と「差  
異性」を併せ持つという点において類似していると述べた。その  
上で、「即席演説」において「わたくし」とポイグが西田の著作に  
抱いた侘しさや寂しさに近い感覚を『死霊』のなかにも見いだした。

さて、ではその上で何故「わたくし」とポイグは「意識せる、非  
善良なハッター」を始めることとなったのだろうか。鶴見はこの「意  
識せる、非善良なハッター」をそのまま『死霊』としてとらえてい  
る。序にも述べたが、「ハッター」とは大げさな言動や、ものごと  
を言葉で実際以上に大きく見せかけて相手を脅かすことである。鶴  
見はこの創作への衝動を「自我の自由への衝動」といい、その自由  
の内容として必然を狂わせてゆくことではないか、と考えた。

外部の現実の中に必然性があるかどうかは、うたがわしい  
から別にすると、内部の必然性、つまりわれわれの思考  
を規制している形式論理のワクはどうであるか？この必然  
性をも、漸進的にくりかえしうたがうことによって、くるわ  
してゆこうとすることが人間各個人にできるのではないか。

必然に屈服するのが、気に入らない。外部の現実をつらぬく必然性は、外部の現実よりもさらにひろいワクでの可能性の領域をつねに思っていることと、それら可能性のくみあわせをとおして現実にあること以外の事件を創作することによって離脱できる。だが、もう一つ、内部の必然性（論理的必然性）は？しかしこれも言語のルールそのものをうたがいで、うちこわすことによって、刻々、ルールをうちこわすごとに一時ずつ、離脱の身ぶりを示すことはできる。これを埴谷は「贅辞コツラの暴力的な使用法」と呼んだ。<sup>20)</sup>

この「必然性」が、形式論理の「当為」に相当すると考えると、「私は私であると考えなければならぬ」という「なければならぬ」を言葉によってうちこわしていくことが埴谷にとつての「自由」であったといえる。埴谷は「自由とは認識せられたる必然」と考えていた当時のことを振り返り、これを「正常論理」とした。このことは共産党活動やマルクス主義思想と関連していると考えられるが、その点は今は置いておく。

それに対する「異常論理病」は「わたくし」やボイグから言葉を奪ってしまった病気である。先にも触れたが「異常論理病」とは、「断定と同一瞬間に、その断定とまつたく同一の力強さと妥当性を

もつて、反対意見がおこるといふ奇病」である。その病を押し切つてボイグが叫びあげたものは訳のわからない不協和音に過ぎなかった、と「わたくし」は述べる。そしてそれこそが「異常論理病」から無理矢理に飛躍した「贅辞の乱用」であることに気づいたボイグのなかには「凄まじい嵐を自ら自身とする哀れな覚悟」ができあがったのだという。そしてボイグはあちら側とこちら側、つまり主語と述語の間で無限に伸びるゴムの如きものになってしまったのである。

一見して埴谷の「贅辞の乱用」は西田のいう「当為の意識」に反するものようであるが、実は西田の文体にも共通した要素が見いだされるのである。安良岡康作は西田の言語的表現に着目し、その文体の特徴について以下のように述べている。

一つの考え方が主張されるとともに、必ず、それ以外の考え方が提示され、それと対決し、それを批判し、そして、自己の考え方を確立しようとしていることである。これは、著者の思索の立場が、自己自身で考えることに徹して行った結果として、その自己がいつのまにか他己（読者の立場）をも包摂してしまったためであると思われる。つまり、自己の思索が他己のそれをも含みながら発展してゆくという、異常に

高められた自己客観の境地に達しているということができよう。<sup>(21)</sup>

自己と対立する非自己を常に想定し、それを包摂して新たな自己を確立するという、いわば弁証法的発展をもつ西田の文体の特徴は、「わたくし」と「ボイグ」の「異常論理病」とその出発点を同じくしている。

「自同律の不快」の論理化について埴谷は多くをカントに関連づけて語っており、西田への言及はカントやドストエフスキー、シュティルナーといった西洋思想家に比べればきわめて少ない。西田と埴谷を「双生児のように見える」とした鶴見も、一方では埴谷を「日本の伝統とはむすびつかぬままに、西洋および東洋のニヒリズムの伝統とむすびついている<sup>(22)</sup>」と評している。しかし、このようにあるテーゼに対立する別のテーゼを常に含んでいるという文体の特徴においても、西田は埴谷の先駆者であると考えられるのではないだろうか。

『死霊』の文章の断絶後における「冗長さ」はしばしば指摘されている。執拗な繰り返しが目立ち、現代作家の島田雅彦は『死霊』の後半部について「緊張感やリズムがない」とし、「厳しいことをいえば、読めるのは四章まで<sup>(23)</sup>」と答えている。『死霊』は筆者の

病によって四章と五章の間に長い断絶があるが、断絶後の五章で登場する夢魔は「はじめはじめ」「おわりのおわり」「思い思いいぐね、思いに思いのこしてついに休まらぬそこ、亡霊宇宙」といったような繰り返し返しの単語を用いて話す。こうした傾向は七章「最後の審判」にはさらに強くあらわれるようになっていく。以下の文章は「名状しがたいもの」について「宇宙の思索者」が語る言葉であるが、その繰り返し返しの多さは一見して明白であろう。

おお、亡者共よ、それが何んであれ、「正」の「砂宇宙」のなかの一粒の砂と砂と砂の重なった乾いた一塊りの灰褐色の砂世界であれ、「負」の遠い「真空宇宙」のなかの果てもない静かな静かな無音が長く長く低く低く木霊する余韻をひきつけている不思議な矛盾に充ちた空虚世界であれ、俺があとで説明する「非」の宇宙のなかの生と死の亡者などにまつた無縁な無生無死者の世界にほかならぬ超精霊世界であれ、もしお前達が、いいかな、全身全霊精魂こめて凝視に凝視を重ねてさらにさらになお凝視しつづけているならば、そのお前達の眼前にあるそのものの薄暗い深い底辺の底辺の底辺、全暗黒の奥所の奥所の奥所に、ぶふい！「名状しがたいもの」こそがぼんやりとした見えるとも見えぬともなく漠とした怖

るべきとも不思議ともいえる或るかたちもないかたちの輪郭をもつて必ず浮き上つてくる筈なのだ。<sup>(24)</sup>

## 結

ここまでで埴谷雄高の「即席演説」および『死霊』から西田哲学との類似点を追ってきた。両者の共通点はいくつか挙げられるであろうが、双方とも「私」と「非私」の統一を動的なものとしてとらえ、それを描き出そうとしたこともそのひとつであるといえよう。そういった観点から本稿は主に「自覚」と「自同律の不快」を中心に見てきた。

西田の「自覚」と埴谷の「自同律の不快」は双方とも動性を持ったものである。「自覚」とは自らが自らを無限に映してゆく働きである。「私は私である」という自同律においては「私」から出発し、「私」の根底に還りつつ更に大きな統一である「私」を体現することとなる。その際、主語の「私」と述語の「私」は異なっていないが同一のものである。ここに「同一性」と「差異性」が同時に成り立つのである。一方、埴谷のいう「自同律の不快」は「私は私である」という自同律にまつわる不快である。この「不快」は主語の「私」と述語の「私」の同一性の証明不可能、即ち主辞と賓辞の断絶としてとらえることができる。また、「自同律の不快」は「私」は「私」と重なる「不快」を感じてそこから逸脱すべく自らを無限に発展させてゆく力としても描かれている。しかし、「私」から完全に逸脱

この繰り返しの表現は決してすべての文に適用されているわけではない。しかし、こうした文体の変化は、後年、埴谷が「言語を絶したものの」への希求をより強めたことを意味するのではないか。埴谷にとつての「言語を絶したものの」は言い表そうとすると逃げゆく不断の動性を持ったものであり、そのためにそれをとらえようとする文体にもまたそれを追うための動性を付与しなければならなかったのではないだろうか。

西田の『自覚における直観と反省』はすべてを「純粹経験」から説明しようとした。それは言葉によって「言葉を絶したものを」を語ろうとした試みであるといえよう。同様の試みを埴谷は文学で行おうとしたのである。西田も埴谷もその「難解」な文章で知られるが、そのことはむしろ、両者のとらえようとしていたものがまさに言葉によつてとらえられないものであったことに由来するだろう。そういった意味では、西田も埴谷も「不可能性」の記述を自らの課題としたといえるのである。

してしまえば、すなわち「自同律」が成立しないのならば、もはやそこには「不快」は起こらないことになる。ここにまた「同一性」と「差異性」が存する。「自覚」と「不快」はこのように無限に続く運動である点、内部から自発する点、そして「同一性」と「差異性」を併せもつたものである点について共通している。

西田と埴谷の文体は双方とも「難解」とされた。くり返しの多用や、すぐに対立する意見を取り込んでゆくような記述の仕方においても似ている。そのような文体の類似は両者が求めたものが記述できないものであったことに由来するのではないか。それは不断に自己差異化してゆくものであり、言葉によつて固定しとらえることができない。それを敢えて記述しようとする、と自体が不可能な試みなのである。

小林敏明は「分節や差異を拒絶する実在」という言葉を絶したものの記述こそが西田の求めたものであり、ジレンマであったと述べている<sup>65)</sup>。しかし、一方でこうした「無限なるもの」は分節化においてのみ触れることができる、と上田閑照は指摘している。

「無限なるもの」が有るというのではありません。分節においてのみ（従つて分節は重大です）、見えない仕方、現れてくるとは、分節さ

れた面では所謂「行間」がその象徴になるでしょう。それも、「行間」が空白であるだけにどこまで深いかわからないという意味においてです。<sup>66)</sup>

実はそれと似た発想を後年の埴谷も持っているのである。中村雄二郎、松岡正剛との対談で、埴谷は言葉と言葉のあいだにある空間を伝えたいのだと語る<sup>67)</sup>。中村が「語り」はたえず「現実」から離れてゆくのではないかと述べたのに対し、埴谷は一字と一字のあいだにある「断絶の空間」があり、それをあらわしたいのだと答える。そしてその「一種の渴望空間」をつくるうとしてるのが『死霊』だという。

言葉と言葉とのあいだにあるものを捉えようとするがために、逆説的に言葉を使って書かなければならない。西田と埴谷の双方の「書く」という行為の中にはそういった矛盾が既に含まれていたといえる。両者の文体の独自さはそうした矛盾と格闘した痕跡であるう。

本稿は主に「自覚」と「自同律の不快」を主に論じたが、埴谷雄高の作品における西田哲学の受容という点に関しては、見るべき点が未だ多く残されているように思われる。たとえば「即席演説」において、ボイグの「ハッター」が生まれた理由について、「わたく

し」は「異常論理病」に加えて「わが国に於きまするさまざまな現象と等しく、奇怪な二重性を帯びていることをも見逃すわけにはゆかない<sup>(8)</sup>」という。そこには日本および東洋の「特殊事情」があったのである。その直後に西田の『自覚に於ける直観と反省』を読んだ経験が述べられていることを鑑みれば、埴谷が日本という場所日本思想をどのようにとらえていたのかについて、西田哲学を通すことで新たな視座を得ることができないだろうか。埴谷は哲学者と文学者の違いについて、カントの仮象の論理学から飛翔していけるかどうかであると述べ、「カントの仮象の論理学では、宇宙論の二律背反で、どうとでも言えるのですね。始めがあるとも言えるし、ないとも言える<sup>(9)</sup>」という。「ある」とも言えるし、「ない」とも言えるものは理性を超えたものであるため、哲学者にとつてその先を考えることは越権行為であり、そこで立ち止まらなければ誤りである。しかし、文学者はそこから出発する、と埴谷は考えたのであった<sup>(10)</sup>。ここに「即席演説」で埴谷が西田のことを「意識せざる、善良なハッターリ」と評した理由が見てとれる。埴谷にとつて西田は「仮象の論理学」のその先を求めた先人であったが、その立場はあくまで哲学者であり、自ら意識的に「仮象の論理学」の先へ飛翔することはできなかったように見えたのであろう。そこで、自らは文学者として「意識せる、非善良なハッターリ」を始めたのである。

そしてその「意識せる、非善良なハッターリ」は鶴見が指摘するように、埴谷の文学者としての自由の追求であった。

また、先にも述べたように、「自同律の不快」のほかに『死霊』の重要なテーマとして「虚体」がある。その「創造的虚無」の文脈は埴谷が若い頃に傾倒したシュテイルナーから由来すると考えられるが、鶴見が述べているように西田の「絶対無」とも類似したものである。埴谷の創作における西田哲学の影響はこういった「無」の観点からも更に検討されて然るべき課題であると考ええる。

※引用にあたって一部旧字から新字に改めた。また、本稿における埴谷雄高の引用は『埴谷雄高全集』（講談社、一九九八～二〇〇一）に依る。註では「全集」と略記した。

（いまいずみ さおり 筑波大学大学院）

## 註

- (1) 埴谷雄高全集別巻『資料集』「年譜」、講談社、二〇〇一年、三四頁。
- (2) 鶴見俊輔著作集二「埴谷雄高」、筑摩書房、一九七五年、四三八頁。
- (3) 埴谷雄高全集一六『二つの同時代史』、講談社、二〇〇〇年、四一頁。

- (4) 埴谷雄高全集一八『生老病死』「生命・宇宙・人類」、講談社、二〇〇〇年、六七頁。
- (5) 埴谷雄高全集一『不合理ゆえに吾信ず』「即席演説」、講談社、一九九八年、一八一〜一八二頁。
- (6) 西田幾多郎『西田幾多郎全集』「自覚における直観と反省」、岩波書店、二〇〇四年、一三頁。
- (7) 西田、前掲書、五三頁。
- (8) 西田、前掲書、五一頁。
- (9) 埴谷雄高全集二『死霊』《死の理論》、講談社、一九九六年、二二六頁。
- (10) 全集二『死霊』《「夢魔の世界」》、四七七頁〜四七八頁。
- (11) 西田、前掲書、七八頁。
- (12) 西田、前掲書、八四頁。
- (13) 西田、前掲書、五四頁〜五五頁。
- (14) 石神豊『自同律と自覚』北樹出版、二〇〇一年、八二頁。
- (15) 『日本文学誌要 第八五号』山田稔「紙の月／埴谷雄高と西田幾多郎2」、法政大学国文学会、二〇二二年、四三頁。
- (16) 全集二『死霊』《死の理論》、一二七頁。
- (17) 全集二『死霊』《霧のなかで》、三七五頁。
- (18) 全集二『死霊』《死の理論》、一一三頁。
- (19) 埴谷雄高全集十三『文学創造の秘密』『死霊』について、講談社、二〇〇〇年、四五六頁。
- (20) 鶴見、前掲書、八一頁。
- (21) 下田寅太郎編『西田幾多郎―同時代の記録―』安良岡康作「言語作品としての西田哲字」、岩波書店、一九七一年、九二頁。
- (22) 鶴見、前掲書、八六頁。
- (23) 木村俊介『奇抜の人―埴谷雄高のことを27人はこう語った』「動き」、平凡社、一九九九年、一三七頁。インタビュー形式で、『死霊』の後半部についてどう思うかという質問に対し、島田は「後半は緊張感やリズムがない。厳しいことをいえば、読めるのは四章までです」と答えている。
- (24) 全集二『死霊』《最後の審判》、七四四頁。
- (25) 小林敏明『西田幾多郎の憂鬱』、岩波書店、二〇〇三年、一六六頁。
- (26) 上田閑照『経験と自覚―西田哲字の場所を求めて―』、岩波書店、一九九七年、一四七頁。
- (27) 全集一八「老年の革命と創造」、一三二〜一三三頁。
- (28) 全集一、一八〇頁。
- (29) 埴谷雄高全集一七『隠された無限』「文学の無限性」、四三三頁。
- (30) 全集一七、四三三〜四三五頁。